

『袖珍獨和新辭林』について （一）

信 岡 資 生

1

日本における独和辞典の嚆矢は明治5年8月に東京で出版された『李和袖珍字書』（小田篠次郎・藤井三郎・桜井勇作編 學半社蔵）とされている。この辞書に続いて同年9月には長崎で『袖珍李語譯囊』（山本松次郎編 出藍社蔵本）、10月には東京で『和譯獨逸辭典』（春風社合著）が、更に翌明治6年5月には『獨和辭典』（松田為常・瀬之口隆敬・村松経春編）、また9月には『和譯獨逸辭書』（京都中學獨逸學教官編）が出版された。このように明治5年と6年にわが国最初のドイツ語辞書が相次いで刊行されたが、その後は明治十年代の後半まで、明治12年5月の『獨和辭彙』（關 吉孝・鹽島一介・熊谷金次郎抄譯出版）を除いて独和辞典の新刊はなかった。その間洋学の隆盛は著しく、就中プロイセンが普仏戦争に勝利した（1870年、明治3年）影響もあって独逸学はいっそう盛んになったが、辞書に関しては英和辞書が独和に一步先んじていた。その辺の事情は明治18年6月に出版され、明治の末期までの長期間増訂版を重ねた大型の『獨辭字典大全』（福見尚賢・小栗栖香平纂譯）の緒言から窺うことができる。

予ガ亡友福見牛潭君ト共ニ獨和字典大全第一版ヲ刊行セシハ去ル明治十八年ノ事ニシテ今ヲ距ルコト實二十四年前ニアリ當時獨和辭書ノ世ニ行ハル、モノ僅々三四種アリシノミ而シテ此等ノモノ皆唯俗解ヲ下スニ過キササルヲ以テ直ニ之ヲ採リテ以テ譯文ノ辭句ト為スコトヲ得ズ故ニ我友人中獨逸書ノ翻譯ニ従事スル者渾テ其譯字ニ苦ミ獨英辭書ニ就テ英譯

『袖珍獨和新辭林』について (一)

ヲ得而シテ更ニ其譯語ノ撰定ヲ吾人ニ請フ者頗多ク予其煩ニ耐ヘサリキ
因テ遂ニ大ニ意ヲ決シテ獨英辭書中ノ英語ヲ和譯スルノ緒ヲ開ケリ時偶
牛潭君大ニ予ガ舉ヲ莊トシ官ヲ辭シテ専ラ身ヲ本書纂譯ニ委子ヨリテ以
テ遂ニ此業ヲ全フスルヲ得タリ… (中略) 是レ實ニ本書第一版發行ノ實
状ナリ然ルニ發刊後未ダ期年ナラズシテ牛潭君逝キ本書第一版亦盡ク爾
來今ニ迫ルマテ年々獨和辭書ノ新刊セラル、モノ十ヲ以テ數フヘク復昔
日缺乏ヲ感スルノ比ニアラス然モ本書ノ販了ヲ告クルゴトニ書肆爭フテ
其改版ヲ促スコト益々急ヲ加フ亦以テ其獨逸學者間ニ行ハル、ノ廣キヲ
知ルヘシ…… (第拾版緒言 明治卅二年七月 君山小栗栖香平識)

西人ノ諺ニ曰ク、歐洲ノ文明ハ、獨逸ノ深林ヨリ發スト、深林果シテ
何ヲカ産スル、曰ク、法、數、哲學ノ玄奧、理、醫、文學ノ精粹、政治、
兵制教育ノ整備、工商ノ發達、總ヘテ是レ人生智識ノ淵叢、國利民福ノ
源委タラザルハナシ、今ヤ我國、亦直チニ彼ノ深林ヲ探リ、徐ロニ之ヲ
自家ノ園庭ニ移サントス、盛ナリト謂フベシ、我當局者亦茲ニ見ルアリ、
高等學校第一外國語學ヲ、獨逸語ニ改メ、又尋常中學ニ課シテ、随意科
目トナス、學界ノ潮勢將ニ是ヨリ一變セントス、此ノ時ニ方リテ、増訂
獨和字典大全出ヅ、誰カ亦本會ノ舉ヲ徒爾ト云ハンヤ、(第四版緒言
明治廿八年七月 田中米作識)

『目で見る明治の辞書』(惣郷正明編 1989年1月 辞典協会発行)に
よれば、「明治十七年から僅か四～五年間に六十種に上る英和・和英辞書
が氾濫した」(同書36頁)という¹⁾。これに対し独和・和独辞書は、明治
10年代の新刊は10点そこそこ、20年代に入っても7～8点の新刊が見られ
たに過ぎない²⁾。東京書籍組合が編集した『明治書籍総目録 明治26年版
総索引』(株ゆまに書房 昭和60年9月)に掲載されている独和对訳字書
は7点を数えるのみ。また、同書明治31年版に掲載されているのは以下の
11点である。

『袖珍獨和新辭林』について (一)

増補訂譯獨和辭書	金子	正價二圓	誠之堂
新撰和獨字彙	平塚 宍戸 塚本	正價一圓十五錢	三河屋
図畫挿入獨和字書大全	行徳	正價三圓	金原書店
補訂挿圖獨和字典大全	福見 小栗栖	正價三圓五十錢	南江堂
増補改正獨和字典	田村	定價一圓	南江堂
挿圖獨和字典	谷口 渡邊 近藤	正價一圓七十五錢	大倉書店
挿圖和譯獨逸字彙	福島	正價一圓八十五錢	大倉書店
獨英和三對字彙大全	高 寺田	正價十圓七十五錢	中西屋 丸善書店
獨英和三對小字彙	寺田 保志	定價一圓五十錢	丸善書店 中西屋
圖畫挿入袖珍獨和辭書	小野	正價六十錢	誠之堂
袖珍獨和新辭林	高木 保志	定價八十錢	三省堂

明治20年代の末に出版された『ドクトル高木甚平 保志虎吉共編 獨和新辭林』は、明治初年以來の国語及び外国語辞典発行実績によって辞書の老舗として自他共に容認する株式会社三省堂が、独和辞典としては最初に上梓したものである。三省堂がこれ以後出版したドイツ語の辞書を刊行年代順に挙げれば下記の通りである。

- 1 獨和新辭林 Neues Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch mit Angabe der gebräuchlichsten Fremdwörter und Eigennamen nebst einem Anhang 高木甚平 保志虎吉共編 明治29年2月
- 2 大正獨和辭典 Neues Deutsch-Japanisches Wörterbuch mit Angabe der gebräuchlichsten Fremdwörter und Eigennamen nebst einem Anhang 保志虎吉編 大正元年9月
- 3 コンサイス獨和辭典 Sanseidoos Concise Deutsch-Japanisches Wörterbuch 山岸光宣編 昭和11年4月
- 4 日英獨佛圖解辭典 Picture Dictionary Bildwörterbuch Dictionaire

Illustré 三省堂編輯部 昭和15年1月

- 5 日獨伊英佛西航空用語辭典 Taschenwörterbuch Flugwesen sechsprachig Deutsch-Englisch-Französisch-Italienisch-Spanisch-Japanisch
宮本晃男訳 昭和17年11月³⁾
- 6 三省堂独和新辭典 Sanseidos Neues Wörterbuch Deutsch-Japanisch
三省堂編修所編 昭和29年3月
- 7 コンサイス独和辞典 増補修正版 昭和31年3月
- 8 最新コンサイス独和辞典 第3版 Sanseidos Neues Concise Deutsch-Japanisches Wörterbuch. Dritte Auflage 倉石五郎編 昭和36年3月
- 9 三省堂独和新辭典 新訂版 Sanseidos Neues Wörterbuch Deutsch-Japanisch. Verbesserte Auflage 篠田英雄 国松孝二編修協力 三省堂編修所編 1963年11月
- 10 コンサイス和独辞典 Sanseidos Concise Japanisch-Deutsches Wörterbuch 国松孝二編 昭和41年4月
- 11 ジェム独和・和独辞典 Sanseidos Gem Wörterbuch Deutsch-Japanisch/Japanisch-Deutsch 藤田五郎編 昭和47年6月
- 12 コンサイス独和辞典 第4版 Sanseidos Concise Deutsch-Japanisches Wörterbuch. Vierte Auflage 倉石五郎編 国松孝二編集協力 昭和47年9月
- 13 コンサイス和独辞典 第2版 Sanseidos Concise Japanisch-Deutsches Wörterbuch. 2., verbesserte Auflage mit Nachtrag 国松孝二編 1976年1月
- 14 コンサイス独和辞典 第5版 Sanseidos Concise Deutsch-Japanisches Wörterbuch. Fünfte Auflage 倉石五郎編 国松孝二編集協力 昭和53年3月
- 15 三省堂独和新辭典 第3版 Sanseidos Neues Wörterbuch Deutsch-Japanisch. Dritte Auflage 篠田英雄 国松孝二監修 三省堂編修所編

『袖珍獨和新辭林』について (一)

1981年 3 月

- 16 デイリーコンサイス独和辞典 Sanseidos Daily Concise Deutsch-Japanisches Wörterbuch 早川東三[編] 1982年 3 月⁴⁾
- 17 ジェム独和・和独辞典 第2版 Sanseidos Gem Wörterbuch Deutsch-Japanisch/Japanisch-Deutsch. Zweite Auflage 藤田五郎編 1986年 3 月
- 18 クラウン独和辞典 Wörterbuch Deutsch-Japanisch CROWN 編集主幹濱川祥枝 1991年 3 月⁵⁾
- 19 クラウン独和辞典 第2版 Wörterbuch Deutsch-Japanisch CROWN. Zweite Auflage 編集主幹濱川祥枝 1997年 3 月
- 20 デイリーコンサイス独和・和独辞典 Sanseidos Daily Concise Wörterbuch Deutsch-Japanisch/Japanisch-Deutsch 早川東三[編] 2000年 9 月⁶⁾

なお、辞書の範疇には入らないが、関口存男著『新獨逸語文法教程』⁷⁾は三省堂が昭和7年4月25日に刊行、同著者がその内容を簡素化して教室での授業に適するように改めて編纂した『初級獨逸語文法教程』(昭和15年2月)と『高等獨逸文典』(昭和15年10月)⁸⁾は、三省堂がこれまでに出版した唯一のドイツ語の教科書(参考書は別として)である。

注

- 1) 『新版蘭和・英和辞書発達史』(永嶋大典著 株式会社ゆまに書房 1970) 巻末の「英語辞書史年表」には、「英学が確立する明治20年(1887)頃までの英和辞書および和英辞書は大小を問わずすべて記載」されているが、この表によれば明治17年から明治22年までの新刊は72点、そのうち明治22年だけでは16点に達している。
- 2) 『日独二言語対訳辞書総覧 総目録 1』(信岡資生 成城大学『経済研究第134号』(平成8年10月)所載)による。
- 3) 『三省堂の百年』(昭和57年4月 三省堂百年記念事業委員会編集 三省堂発行)の「三省堂百年史 略年表」にはこの書の記載がない。
- 4) 社会福祉法人日本ライトハウス点字情報技術センターが、平成8年10月に

『袖珍獨和新辭林』について (一)

刊行した『点字版独和辞典』(全56巻)は、この辞典を原書にして点字化したものである。

- 5) 音声入り電子ブック版と CD-ROM 版も発売されている。
- 6) この辞典の前半の独和の部は、『デイリーコンサイス独和辞典 第2版』である。
- 7) その後1950年12月25日に改訂版、1964年4月10日に三訂新版、1980年2月20日に第四版がそれぞれ発行されて今日に及んでいる。
- 8) 『関口存男の生涯と業績』(三修社 1959年)所載の荒木茂雄「先生の業績と著書」参照。

2

三省堂の創業者は亀井忠一である。五十嵐栄吉編・発行の『大正人名辞典』(第4版 東洋新報社 大正7年12月;リプリント版 (株)日本図書センター 1987年10月)によると、

亀井忠一君

三省堂主

君は舊静岡藩主中川市助氏の四男にして安政三年六月三十日を以って江戸城下に生る、明治三年十四歳にして龜井家に入り養嗣子となる。書肆三省堂を經營して出版界を席捲せしは世人周知の事に属す。不幸破綻を呈せしと雖も、倦土重來せんこと君が剛毅不屈の資性に徹して推知すべきなり。

令閨まき子賢婦の稱あり、君を佐けて内助の功頗る大也。

とある。この記載について「静岡藩主」は「静岡藩士」の誤記と思われるが、そもそも静岡藩というものが存在するのも疑問である。徳川慶喜が大政奉還後駿府に蟄居したことをもって、旗本はみな静岡藩士としたということであろうか。また「不幸破綻を呈せし云々」とは、社運を賭けて企

『袖珍獨和新辭林』について (一)

画した『日本百科大辭典』の編修が難航して経営が行詰まり、大正元年いったん倒産したことを指している。三省堂はその後立ち直り、忠一自身昭和14年まで存命した。

亀井忠一については、『三省堂の百年』（昭和57年4月 三省堂百年記念事業委員会編集）に詳しい。それによれば生家の中川家は二百五十石の幕臣、また養家の亀井家も五百石の旗本で、維新後徳川慶喜に従って静岡に移住していて中川家と縁を結ぶことになったという。亀井忠一の生家について、『江戸幕府旗本人名事典』（石井良助監修 小川恭一編著 原書房 1989年8月）、『寛政譜以降旗本家百科事典』（小川恭一編 東洋書林 1998年5月）、『江戸幕臣人名事典』（小西四郎監修 熊井保・大賀妙子編集 新人物往来社 1990年3月）によると、禄高250石内蔵米50俵（『江戸幕臣人名事典』では700石）で小川町に屋敷があり、実父市助は開成所頭取（文久2年）、御鉄砲玉薬奉行（安政3年と慶応元年の二度）に就いている。また、養家の亀井家は駿河台に屋敷があって禄高500石、養父与十郎は小納戸役に就いている（弘化3年）。

明治6年亀井忠一は一家を挙げて上京、まず麴町で履物屋を開業したが、明治14年2月大火に遭って焼け出され、神田で古本屋を営んでいた兄の許に避難、そこで本屋の商売を知って転業を決意、「職業に貴賤なしとはいえ、下駄商の如きは全国はおろか、全市にその得意を求むることも難しい。良書を作り売り出せば、自家を益するのみならず、広く天下国家を裨益する。したがって業運の発展も無限なるべし」（『故亀井万喜子刀自追想録』より）と、裏神保町で古本屋を開業した。店の名の由来は、『論語 学而篇』の「曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」に拠るものである。呼び名も当初は Sanshodo で、現在のように Sanseido となったのは明治23年3月の出版物からである。

当時神田界限は文明開化による洋学隆盛の風潮の中で各種学校・私塾の開校相次ぎ、洋書を求める学生の往来が盛んであった。古本屋といっても

『袖珍獨和新辭林』について (一)

その売買は洋書が主であり、学生の動向と要求に留意するうち進んで洋書の翻刻出版に着手するようになったのも自然の成り行きかもしれない。忠一の妻万喜子も学問好きで外国語学習に励み、まずドイツ語からはじめたと言う。三省堂の出版第1号となった『ウキルソン氏第一リードル獨案内』（明治16年2月）と、三省堂として初めての外国語辞書『英和袖珍字彙』（明治17年3月）は、桃林堂¹⁾、開新堂、十字屋と組んでの四書房合梓であったが、この辞書は小型で携帯に便利なうえ実用的であったがため、頗る好評で製本が追いつかないほど多数の注文を受けた。この辞典の成功が「辞書の老舗」としての三省堂の基となったと言えよう。

三省堂が単独で出版をはじめたのは明治21年9月からのことで、同年4月に同盟出版された『和英袖珍字彙』に続いて9月に出版した英語辞書『ウェブスター氏新刊大辭書和譯字彙』こそは、三省堂がはじめて単独で企画・編集・出版した記念すべき辞書である。この後も『英和袖珍新字彙』（明治23年）、『和英袖珍新字彙』（明治24年）、『英和新辭林』（明治27年）と、外国語辞書としては英語が続いた後、これら英語辞書の成功の余勢を駆って明治29年になってようやく三省堂初のドイツ語辞典が誕生することになる。

この間の状況を、弥吉光長は『未刊史料による日本出版文化 第五卷 近代出版文化』（株式会社ゆまに書房 平成2年8月）の「第五章 明治時代とその後の出版社」の中で三省堂を次のように記述している。

三省堂といえば昔から辞典で有名であり、辞典のために印刷所を特設しているというくらいで、同時に地の利を得て千二百余坪の販売場を有効に生かしている。その初代亀井忠一（一八五六—一九三六）は旗本中川市助の五男で、やはり旗本納戸役の亀井与十郎の養子となった。五百石の旗本も、明治で官員でなければ生計に差支える。忠一は一八七三年、麹町で小さい下駄履物店を始めたが四谷の大火（一八八一）に焼出され、

『袖珍獨和新辭林』について (一)

美土代町の兄の古本屋を手伝って、自ら古本屋となった。丁度洋学熱の盛んな頃で店番をする妻の万喜子は夜は乳呑児をかかえて英仏独語を習った。教える忠一の方がその努力に感じ驚いたという。

洋書は、高いので一八八二年頃からリーダーの翻刻をはじめたといわれる。翌八三年二月に『ウキルソン氏第一リードル獨案内』九四頁を四十五銭で出版した。桃林堂、開進堂、十字屋と同盟四社版であった。翌年には『英和袖珍字彙』を西山義行編、これも同盟四社版で毎年何点かを発行し、注文に追付かないほど売れたという。一八八八年三省堂は『ウェブスター氏新刊大辭書和譯字彙』をイーストレーキと棚橋一郎共訳で発行した。これは菊判一、三七八頁という大辞典で、単独発行であった。高いにも係らず、英語を学ぶ者は必ずこれを買った。一九〇二年には二十余版を重ね、一九二〇年には五十七版、二、三百部²⁾を売ったであろう。同年イーストレーキ・棚橋一郎編『英和袖珍新辭典』八七〇頁でポケット判で、またよく売れた。翌年はイーストレーキ・神田乃父編『和英袖珍新辭典』を発行した。両方共六〇版を超え、「辞典は三省堂」といわれるほどになった。辞典は印刷が生命であると考えた忠一は、一八八九年にトイツ直輸入の精巧な機械を備付けた。

ところが災なるかな、一八九二年の神田の大火で一切の店、品物、印刷所まで焼落ちてしまった。しかし、その復興もめざましかった。半年後には間口七間の二階建の店に土蔵をつけて火事に備えた。古本屋は止めて出版に注力し、『支那歴史』『日本通史』『萬國史綱』などの教科書と地図類の新工夫をした。三崎町河岸に理想的印刷所を設置することにして、袖珍辞典は細字が鮮明に見える工夫をした。……

履物屋は武士の商法であったかもしれないが、洋書の売買から辞書の出版に着眼したのは、時勢の先を読んだもので、まさに慧眼であったと言えるよう。

『袖珍獨和新辭林』について（一）

注

- 1) 上述のように亀井忠一が静岡から上京して最初身を寄せた兄が経営する本屋。
- 2) 原文のまま。二、三百万部の意味か。

3

これまで『袖珍獨和新辭林』を辞典調査研究の対象として取り上げたものとしては、まず石本岩根の「明治年間に於ける獨和及び和獨辭書に就て」（『愛書』第一輯 昭和8年6月 臺灣愛書會）がある。これは、著者のことばによれば、「研究の一項目である語學の部の然もその一部分をなす辭書に関して、時代を明治に限って覚え書の體裁に記したもの」であるが、そこには12番目の辭書として、下のように記されている。

袖珍獨和新辭林 高木甚平・保志虎吉共編 東京 三省堂 明治二十九年（一八九六）洋小

小型洋本で横二寸、縦二寸五分、厚さ一寸二分、俗に云ふ豆字引である。凡例に「本辭書ハウエーニヒ、ザンデル、ハイゼ、カルトシュミット、チーメ、チボー、マイエル、ロイスレル¹⁾、ブロックハウス等幾多大家ノ辭書ヲ参照シ、其粹ヲ抜き其華ヲ鐘メ取捨折衷シテ編成セルモノナリ」とある。編者は簡潔明確を旨とし、譯字の撰定配合に注意し、雅俗兩様の譯を載するに當って雅語中に俗語の假名を附して一舉兩得の便法を構じたる事、人名地名又神祇の名稱には故さらに英語を附記して「英學者ニシテ獨逸語ヲ學ブモノ」の為に便宜を計って居るのは周到と云はざるを得ない。この辭書は當時盛んに使用せられ、版を重ねる事數十版に及び今日尚古書肆の店頭にその姿を發見し得る程である。

これが『袖珍獨和新辭林』を記録した最初のものと思われる。

『袖珍獨和新辭林』について (一)

明治期の各種外国語辞典の研究者として知られる惣郷正明が、朝倉治彦との共編『辞書解題辞典』（東京堂出版 昭和52年）には、次のように記されている。

袖珍獨和新辭林 しゅうちんどくわしんじりん 高木甚平・保志虎吉共編 三省堂 明二九・九 一五九四頁 91×61 八〇銭 横一組三三行。亀甲文字，挿図入り，語義は数個を付す。凡例に「雅俗兩様ノ譯ヲ施シ…雅語中ニ俗語ノ假名ヲ施シー舉兩得ノ便法ヲ取り…俗語ハ多ク東京ノ語ヲ用ヒタレドモ地方ノ俗語ニシテ世人ノ能ク知ル所ノモノハ又之ヲ用ヒタル所少ナカラズ」。付録（一五四〇頁以降）＝動詞表，略語解。明三二・六，八版による。独文標題 Neues Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch

熊本大学の上村直己教授は，「『袖珍獨和新辭林』編者・高木甚平」（『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第29号』105－124（1994）所載）と，「ドイツ語学者 保志虎吉略伝」（『日独文化交流史研究 1995年号』日本独文史学会 所載）で，この辞書の二人の編集者について詳細な研究を発表しているが，その中で当然『袖珍獨和新辭林』自体についても触れている。特に前者の論文では，「4.『袖珍獨和新辭林』の出版」と題した独立の節が設けられて3頁半にわたるこの辞書についての論及が見られる。上村教授には他にも「日本における独和辞書発達小史」（『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第24号』所載）があって，ここでもこの辞書を取り上げている。上村教授のこれらの論文については，このあとでもしばしば引用することになる。

高梨武臣の「独和辞典の比較」（『図書館雑誌 Vol. 65, No. 6』所載）にもこの辞書について「豆辞典の先駆であり，簡潔明確を旨とし，訳語選択には注意し，雅俗兩様の訳を載せてあるのが特徴である。特に雅語には

『袖珍獨和新辭林』について (一)

俗語のカタカナを附して便を宣ってあり、当時普及した辞典の一つ」であるとしている。

注

- 1) 原文のまま。後述するようにクロイスレルの誤記。

4

『東京朝日新聞』明治29年9月29日朝刊にはその第七面の下半分のスペースをとって三省堂書店の新刊広告が出ている。そこには『帝國大辭典』『和英大辭典』『袖珍獨和新辭林』の3冊が『掛軸日本帝國大地圖』とともに掲げられ、「前掲三辭典は弊店多年の苦心によりて成るもの、其価値は此に喋々せず見本を御一覽ありて未曾有の大傑著たるを知り玉へ郵券二錢御送附あれば総ての見本を呈す」とある。これによれば既に製本成った『袖珍獨和新辭林』は「高等商業學校教授ドクトル、ユリス高木基平先生 第一高等學校教授保志虎吉先生合編」で、「洋装全一冊縦三寸二分横二寸四分紙數千六百三ページ正價金七十錢（郵税金四錢）」であるが、「三千部限特別廉價金六十錢（十一月限）」となっている。

筆者の手元には明治37年8月15日発行の15版と明治38年10月28日発行の16版があるが、縦9.2cm、横6.3cm（表紙ではなく本文頁の寸法）で、旧尺貫法に直せば広告の寸法よりやや小さい。また奥付前の Anhang 最終頁は1594であるが、扉から序、凡例、「本書所用ノ畧語」までに10頁を費やしているから総頁千六百三ページは正確である。因みに16版の奥付によると、初版は「明治廿九年九月十五日印刷、同年九月十九日発行」となっていて、以下

明治廿九年十一月廿八日再版發行	明治卅二年 六 月十七日 八 版發行
明治廿九年十二月二十三日版發行	明治卅二年十一月二十日 九 版發行
明治卅十年 六 月 四 日四版發行	明治卅五年 一 月廿八日十二版發行
明治卅一年 一 月 六 日五版發行	明治卅五年 八 月廿四日十三版發行

『袖珍獨和新辭林』について (一)

明治卅一年 一 月廿一日六版発行 明治卅五年十二月十六日十四版発行
明治卅一年 十 月廿三日七版発行 明治卅七年 八 月十五日十五版発行
と記されていて、この豆辞書の好調な売行きの程が知れる (図4 参照)。

扉は見開きになっていて、左側に「ドクトル高木甚平 保志虎吉共編
獨和新辭林 三省堂発行」、右頁には Neues / Deutsch = Japanisches /
Taschenwörterbuch/ mit/ Angabe der gebräuchlichsten/ Fremdwörter und
Eigennamen/ nebst/ einem Anhang/ von Dr. Z. Takaki und T. Hoshi./
Tokyo, 29. Meiji./ Verlag von Sanseido とドイツ字体 (亀の甲文字) で記
されている (図1 参照)。「袖珍」の文字は表紙にもここ扉にも見当たらな
くて、本文の第1頁に「Neues/ Deutsch=Japanisches/ Taschenwörterbuch.
袖珍獨和新辭林」と記されているのである (図3 参照)。しかし上述の通
り三省堂自身の広告の書名に「袖珍」の文字が入っているし、ドイツ語名
が Taschenwörterbuch であることなどから、『袖珍獨和新辭林』が正式の
辞書名と思われる。もっとも独和に先行した同社の姉妹書の英和は袖珍を
冠さない『英和新辭林』(イーストレーキ・岩崎行親・棚橋一郎・中川愛
咲・秋保辰三郎共著 明治27年5月)であるが、英語名も New English=
Japanese Lexicon である。三省堂は東京書籍商組合事務所発行の『圖書
月報』¹⁾ にしばしば広告を掲載させているが、その第一巻第十号 (明治36
年6月) の広告では「獨和新辭林」なのに、第二巻第四号 (明治37年1月)
の広告では「袖珍獨和新辭林」、また大正元年9月三省堂発行の『大正獨和
辭典』初版巻末の広告でも「袖珍獨和新辭林」²⁾、さらに『三省堂独和新
辭典』(昭和29年3月)の「序 本書の成立について」の中では「独和新
辭林」、『三省堂の百年』の略年表でも「独和新辭林」といった具合で、袖
珍を形容詞として使ったり正式な書名に入れたりで一貫していないのは甚
だ不見識と言わざるを得ない。

「袖珍」とは本来「着物の袖の中に入るほど小型の」の意味で、もっぱ
ら携帯に便利な辞書の形容詞として明治初年から盛んに用いられてきた。

保志虎 高木其平 共編 第十五版
 獨和新辭林
 三省堂發行

図 1

Neues
 Deutsch=Spanisches
 Taschenwörterbuch
 mit
 Angabe der gebräuchlichsten
 Fremdwörter und Eigennamen
 nebst
 einem Anhang
 von
 Dr. G. Lafati und E. Köpfi.
 Zolho, 29. Weij.
 Verlag von Sanseido.

『袖珍獨和新辭林』について (一)

『雑珍獨和辭林』について (一)

- 一 本辭書所用ノ俗語ハ多ク東京ノ語ヲ用ヒタレドモ地方ノ俗語ニシテ世人ノ聽カケト書シテ仕掛ノ字ヲ省キタルガ如キ是ナリ
- 一 雅語中ニ俗語ノ假名ヲ施シ一變兩得ノ便法ヲ取リタル所多シ限ナズ〔緊度〕ノ本辭書ニハ雅俗兩腔ノ譯ヲ施シタリ然レドモ徒ニ紙數ヲ増スノ恐アルガ故ニル所ニハ往々之ヲ省ケリ
- 一 之ヲ區別セリ然レドモ其義始メト相近似シ判然區別アルノ必要ナシト認メタ
- 一 一語ニシテ數意義ヲ兼ズルモノニハ其義變更スル毎ニ㊦㊧㊨等ノ附號ヲ以テ圖六條ノ譯語ヲ先ニシタルガ如シ
- 一 〔煩苛〕ノ意義ニ用フルヲ以テ此譯ヲ最初ニ掲グベキナレドモ既而大義〔佛ニ由來セル意義即チ轉義ヲ其順ニ從ヒテ配置セリ即チ㊩㊪ニノ如キ今日多
- 一 本辭附註ノ總裁ハ普通多ク用ヒラル、意義ノ如何ニ係ヘラズ既而先ニシ之ヲ採擷シテ編成セルモノナリ
- 一 ロイスレル、ブロッグハウス等幾多大家ノ辭書ヲ参照シ其辭ヲ攷キ其單ヲ録メ原
- 一 本辭書ハウエーニヒ、サンデルハイゼ、カルトシユニツト、チーメ、チボー、マイエル、ク

凡 例

2
図

明治二十九年九月上辭

編 者 識

らんさす唯だ之に因て多少初學者に裨益する所あれば幸甚なり。
らくは遺脱誤謬多からん是等ハ他日再編を待ち訂正増補する所あ
稍や遺憾なきものに庶幾からん歟然れども金銀の謫劣薄識なる恐
不便あることなかるべし以ふに辭書の要訣たる簡明の點に於ては、
を索め右視左瞻々乎として遂に一字を看出さずして已むが如き
り煩紛に流るゝなきを力めたれば、夫の辭書の通弊たる彼を探し此
挿入したるが如き亦是れ明を期するの一端なりとす、且つ煩雜に涉
るが如き少しく解し難き處に詳細の説明を加へ或は優美なる圖を
して意義變更の處に區別を立てたるが如き、雅俗兩様の譯を附した

(國) …… 語	(註) …… 語	用	語
(英) …… 語	(後) …… 語		

Neues Deutsches japanisches Taschenwörterbuch. 袖珍獨和新辭林

ㇿ

ㇿ. 獨逸字母ノ首字.
 ㇿaf, n. (-s, pl. -e), od. f. (pl. -en) 茶屋川ノ畔松ノ林.
 ㇿaf, m. (-es, pl. -e) ㇿ. 煙草 ㇿ. 煙草ノ一種 ㇿ. 黒色ノ
 細 ㇿbaum, m. 忍冬ノ一種. -beere, f. 黒色ノ
 低盤子(キイチゴ). -behälter, m. 貯池, 蓄水器.
 -bülle, f. 鯨ノ一種. -eisen, n. 鋸又, 鋸以[鋸ヲ捉
 フルニ用フル又狀ノ儀] -fang, m. ㇿ. 鋸ヲ捉フル丁.
 ㇿ. 鋸ヲ捉フル時候又ハ場所. -gabel, f. 鋸又, 鋸
 以. -halter, m. 貯池, 蓄水器. -forb, m. 貯器.
 貯器[鋸ヲ捉フル竊ニシテ密斗狀ノ口アルモノ] -lege,
 f. 器梁. -palette, f. 鋸以[鋸ニテ割シタル板頭ノ
 細]. -bride, f. 鋸又, 鋸以. -reufe, f. 鋸以, 鋸以.
 -fdlange, f. 海鏡, 鋸以. -streif, m. 鋸以[鋸背又
 ハ肩背ノ]. -suppe, f. 鋸煮(ウナギノツツ).
 thierchen, n. 鯨魚ノ一種[鰐等ノ中ニ生ズル].
 -weib, n. 鯨魚. -weib, m. 海鏡.
 ㇿalen, n. (h.) 鋸ヲ捉フル. 鋸ヲ釣ル.
 ㇿap, n. (-es, pl. -e) (統) 尾把索帆.
 ㇿar, m. (-es, pl. -e) ㇿ. 尾把. ㇿ. 尾.
 ㇿas, n. (-es, pl. -e) ㇿ. 尾. ㇿ. 尾.
 -blatter, f. 鯨魚アル皮膚ノ名. -fächer, m.
 ㇿ. 鯨肉ヲ食フ甲蟲. 腹肉中ニ細テツクル
 用器. -fräße, f. 鯨肉ヲ食フ蟲. -pfänge, ㇿar (s)
 f. (統) 白鰐科ノ魚. -pofe, f. 鯨魚アル皮膚ノ名.
 ㇿafen, v. a. ㇿ. 鋸ヲ附クル[釣鉤等ニ]. 鋸ヲ置ク[鯨ノ]



『袖珍獨和新辭林』について (一)

今日ならさしずめ「ポケット型」というところであろう。上述の独和辞書の嚆矢となった『李和袖珍字書』からして袖珍の文字を冠しているが、手元にあるこの辞書の現物³⁾に巻尺を当てて見ると、本丁の縦は16.35cm、横は11.7cmで、厚さは表紙共だと8cmある。また同年9月に長崎で出版された『袖珍字語譯囊』の大きさは鈴木重貞の記述⁴⁾によると19.5cm×12.5cmとさらに大きく、「当時、枕に適する故、「枕字引」と言われたのにふさわしい大きさ」であって、袖珍の名に到底値しない。

当時までの独和辞典にも「袖珍」の名を冠したものが多かった。例えば『挿圖袖珍獨和辭書』(ホフマン原著 小野 操纂譯 伊藤誠之堂 明治18年11月 4寸3分×3寸)、『獨和袖珍字彙』(井上 勤纂譯 字書出版社 明治18年12月 5寸5分×3寸8分)、『袖珍獨和字典』(山脇 玄校閱 田村化三郎纂譯 南江堂 明治26年9月 菊半⁵⁾)があり、いずれも『獨和新辭林』より大きい。では「袖珍」の名を謳わない普通の辞書はどの程度の大きさであったかを見るに、当時比較的良好に利用されていたと思われる『増訂挿圖獨和辭典大全 増訂第4版』(福見尚賢 小栗栖香平纂譯 谷口秀太郎 渡邊醇之助増訂 明治講醫會藏版 南江堂發行 明治28年)が縦22.4cm×横15cm(手元にある明治31年6月20日発行の第8版本の実測)、『獨英和三對字彙大全』(高 良二 寺田勇吉譯 共同館 明治20年6月)が、縦26.5cm×横20.0cm(手元にある初版本の実測)といずれも大型であったから、これらと比べると『獨和新辭林』はいかにも袖珍であったわけである⁶⁾。三省堂はこの語がよほど気に入ったと見えて、それまでも『英和袖珍字彙』(同盟四社版 明治17年)、『和英袖珍字彙』(同盟六社版 明治21年)、『英和袖珍新字彙』(明治23年)、『和英袖珍新字彙』(明治24年)と、片っ端から自社出版の英語の辞書にこの文字を冠した。三省堂のトレードマークの一つ「コンサイス」シリーズの第1号の英和辞典でさえ、『袖珍コンサイス英和辭典』(大正11年8月)であった。

『袖珍獨和新辭林』について (一)

注

- 1) 株式会社ゆまに書房のリプリント版（昭和60年8月）による。
- 2) 『袖珍獨和新辭林』の第二十一版の広告である。大正に入ってもなお売行きが好調であったことが知れる。
- 3) 1981年に三修社が復刻したものではない、念のため。
- 4) 鈴木重貞著『ドイツ語の伝来』（株教育出版センター発行 昭和50年7月）の91、及び87頁参照。
- 5) 縦10.9cm×横7.6cm
- 6) 平成の現在三省堂の発行する、というよりも日本全国の出版社が発行する各種ドイツ語辞書の中で最小の型のものは、先に挙げた『ジェム独和・和独辞典 第2版』で、縦10.6cm×横5.9cmだが、袖珍の名は冠っていない。

5

『袖珍獨和新辭林』の扉に続く「序」には次のように述べられている。

辞書の要訣は簡潔明確にあり、而れども簡なれば則ち明ならず、明なれば則ち簡ならず、世間辞書の類多しと雖も、能く簡にして明なるは罕なり、殊に獨逸語の辞書にして簡明ならんを望むは較や難事なりとす、是れ獨逸語の性質たる、語に語を聯ぬれば、則ち新に語を成し其數殆んど無盡なればなり、今若し其語數を淘汰し其骨子のみを摭はんとせば簡に失するの恐あるべく、其譯字を減じ其解釋を省略せんとせば明を缺くの憂あるべし、簡と明とをして兩つながら全からしめ、其の一に偏するなからしめんには、唯だ活字の組植に工夫を凝らすと、譯字の撰定配合に注意するの法ある耳、是れ編者が本辭典の編纂に於て大に心を用ひたる所にして、美麗なる七號小活字を用ひたるが如き、主語の下に聯合語を配したるが如き、行に餘れる字を前後の餘白に埋めたるが如き、即ち簡を主とする意に出でたるなり、而して意義變更の處に區別を立てたるが如き、雅俗兩譯を附したるが如き、少しく解し難き處に詳細の説明を加へ或は優美なる圖を挿入したるが如き、亦是れ明を期するの一端なり

とす、且つ煩雑に涉り續紛に流るゝなきを力めたれば、夫の辭書の通弊たる彼を探し此を索め右視左眄、朦々乎として遂に一字を看出さずして己むが如き不便あることなかるべし、以ふに辭書の要訣たる簡明の點に於ては、稍や遺憾なきものに庶幾からん歟、然れども余等の論劣薄識なる、恐らくは遺脱誤謬多からん、是等是他日再鐫を待ち訂正増補する所あらんとす、唯だ之に因て多少初學者に裨益する所あれば幸甚なり。

明治二十九年九月上澣

編 者 識

この2頁にわたる序にすぐ凡例が続くが、他に名士や貴顕・高位高官の人物の推薦文や揮毫が見当たらないのは当時の辭書としては異例のことと言える。また当時の独和辭書の序文では、西欧先進国の文物制度を採り入れて列強に遅れをとらぬようにするためには独逸語學習の必須たること、しかし適正な独和辭書が世に乏しいことを謳うのが常であることを思えば、そうした言辞の見られないのもユニークと言えよう。

『袖珍獨和新辭林』の成立のいきさつについて、半世紀以上にわたって三省堂の各種事典や教科書の編纂に携わった斎藤精輔が、その回顧録『辭書生活五十年史』（復刻本 図書出版社 1991年11月）の中で、次のように記している。

かくのごとく各種の袖珍英和・和英辭書総て整備したるをもって、さらに独和辭典方面に手を染めんとし、余は第一高等学校独逸語教授保志虎吉氏を訪問し、袖珍独和辭書の編纂を乞えり。氏は前に大独和辭書を編纂したる事あり、そのころ唯一の辭書編纂の経験家にして、世の令名嘖々たるものありしが、氏は余に対し、余は前に辭書を編纂し、つぶさにいかに辭書編纂が困難なるかを知悉せり、今後再びこれが編纂を試みざる決心なるをもって、今回は遺憾ながらこれを謝絶したしとの事なりしが、余はいえり、余はまったく独逸語を解せず、されど辭書編纂には

多年の経験あり、自分の勉強のため優秀なる独英辞書を選び、英語の力をもってこれが翻訳を試みたき希望なり、されど独逸語を解せざる余の事なれば頓珍漢の事多かるべし、ついではその訳を検閲訂正したまう事は願われまじきやと。保志氏声に応じていわく、それだけの事ならば、いと易き事なり、まず十頁ばかり見本を作り持ち来らるべしと。余すなわちホイットニの独英辞書を逐語的に翻訳することとし、最初の数葉を訳してこれを保志氏に示せしに、氏いわく、なるほど英和辞書編纂の経験者の事とて、前の独和辞書に見られざる名訳多し、よろしくこの方針にて進まれたしとの事なりしが、亀井氏は本独和辞書を二箇月間に完了せんと乞いしをもって、余は英和辞書編纂当時のごとく、どこか閑静なる境地に引籠り、一切社会との交渉を絶ち、もってこれを完了せんと決意し、店員久保田以政氏を伴い、沼津を手始めに、古奈・修善寺・吉奈・船原の諸温泉地を巡り、好個の閑居地を捜査せしも、どこにも適当なる場所無かりしが、最後に湯ヶ島に至り、落合楼¹⁾に投宿せり、楼主と久保田氏とは従来よりの知人なりしかば、久保田氏はその来意を告げ、この近所にどこか閑静なる書齋用の室無きかと尋ねしに、楼主は、それはこの家の二階の六畳の間こそ適当なるべし、案内すべきにより試に一覧ありたし、との事なりしをもって、両人は楼主に従いその室に入り、これを一見せしに、前に天城山の翠岳を仰ぎ、狩野川の清流に臨み、風景絶景なる閑静の室なりしかば、余は久保田氏と相談の上、この室を借る事とし、行李より種々の参考書を取り出し、これを机上に並べて編纂準備に着手せり。その翌日久保田氏は東京に帰り、余はその日より毎日独和对訳語付訳に専念し、その付訳を終るごとに、およそ三日目にこれを保志氏の許に送りてその是正を仰ぎ、約二箇月を閲してその全部を訳了しぬ。

時これ明治二十八年十月の事に属し、かく短兵急に筆を呵せし事とて、余は痛く疲労を感じ、亀井氏の勧めらるるままに、氏の家族が沼津にな

る静浦に保養中なりし静浦館に立寄り、約二週間その地に滞在せり。

(第八章 辞書編輯奮闘時代 87～88頁)

これによると原稿（少なくとも下書き）を書いたのは保志でも高木でもないことになる。しかし上に引用した編者の序文にはこのことに関しては片言も触れられていない。また、序文に続く凡例の最初にも

一 本辞書ハウエーニヒ、ザンデル、ハイゼ、カルトシュミット、チーメ、チボー、マイエル、クロイスレル、ブロックハウス等幾多大家ノ辞書ヲ参照シ其粹ヲ抜き其華ヲ鍾メ取捨折衷シテ編成セルモノナリ (図2 参照)

としていて、斎藤のいうホイットニは挙がっていない。これはいささかフェアとは言えないのではないだろうか。

斎藤のいうホイットニの独英辞書とは、A Compendious German and English Dictionary, with notation of correspondences and brief etymologies, by William Dwight Whitney, assisted by August Hjalmar Edgren. New York, Henry Holt and Company, である。1877年にアメリカの言語学者 W. D. Whitney²⁾ が編集した辞典で、慶応大学図書館に現存するのは大きさ18.8cm×13.3cm、背表紙に WHITNEY'S GERMAN-ENGLISH AND ENGLISH-GERMAN DICTIONARY と書かれているように、本文は PART I. GERMAN AND ENGLISH (537ページ) と PART II. ENGLISH AND GERMAN (362ページ) の2部に分かれた独英・英独辞典で、1887年版である。ただし保志のために付言するならば、見出し語や訳語を比べてみたところでは、『獨和新辭林』がこの辞書を種本にしていると言うことはできないようである。

他の参考文献として挙げられている書物についても言及すると、以下の

通りである。

○ ウエーニヒ Chr. Wenig's Handwörterbuch der deutschen Sprache, mit Bezeichnung der Aussprache und Betonung, nebst Angabe der nächsten sinnverwandten und der gebräuchlichsten Fremdwörter und Eigennamen. 本書の初版は1821年であるが、手元にある版 Neu bearbeitet von Dr. L. Kellner, Sechste, sorgfältig verbesserte und vermehrte Auflage. Köln, 1876. Verlag der M. Du Mont-Schauberg'schen Buchhandlung を使用したのではないと思われる。この辞書は大方の明治期の独和辞典が参考文献として挙げている。例えば、『増訂挿圖獨和辭典大全 第四版』（初版明治17年）の序（明治28年7月 明治講醫會主幹田中米作識）に「夫レ本書ハ、曾テ福見、小栗栖ノ二氏ガ、ホフマン、ハイゼ、ザンデル、キョーレル、ゼームス、アドレル、マイエル、ブロックハウス、ウエーベル、ウエーニヒ諸家ノ辭書ヲ涉獵纂譯シタルモノ」、『図畫挿入獨和字書大全』（行徳永孝纂譯 明治23年 金原蔵版）の凡例に「一 本書ハ獨逸字書中ノ最モ精確簡明ヲ以テ有名ナル「ウエニヒ」氏ノ字書ヲ原トシ傍ラ「ウエベル」氏ノ字書并ニ「マイエル」「ホフマン」「サンデルス」氏等ノ諸書ヨリ纂聚セリ」、『増訂獨和辭彙 第三版』（風祭甚三郎纂譯兼出版人 明治20年2月 後學堂蔵梓）の緒言に「一 此書ハ獨逸人ウエベル、ホフマン、ウエニヒ三氏ノ辭書ヲ原本トシ其他諸書ヲ参考シテ纂譯増訂シタルモノナリ」、『挿圖和譯獨逸字彙 第貳版』（福島鳳一郎纂譯 明治26年5月 大倉書店蔵版）の緒言に「獨ノ學士ウエーベル、ウエーニヒ、ハイゼイシ氏著ノ字書ニ因テ全体之ヲ譯出シ傍ラブロックハウス マエ、ル其他諸氏ノ字書ヲ參酌シ以テ此書ヲ編纂シ」など、枚挙に暇がない。後年大正元年保志が出した『大正獨和辭典』の凡例の最初にも「本辭典ハ Sanders, Wenig, Heyse-Lyon, Meyer, Brockhaus, Flügel-Schmidt-Tanger, Muret u. Sanders 等諸家ノ辭書ヲ參酌シテ編成セルモノナリ」と書かれているが、書名が原語で書かれるようになったことにも留意すべきであろう。

なお明治30年代の月刊『獨逸語學雜誌』(獨逸語學雜誌社發行)³⁾にはほぼ毎号のようにこの辞書の翻刻版『ウエーニヒ獨逸字典 全一冊』の広告が次のように掲載されている。

増訂八版 ウエーニヒ獨逸字典 全一冊 總クロース背金字入 四六版紙數千六十六頁 正價金貳圓五拾錢

字書ノ要ハ言語ヲ知ルニアリ言語眞義ハ同一國語ヲ以テ解釋スルニ非ザレバ到底精確ヲ期スベカラズ是レ對譯字書ノ接踵續出スルニ拘ハラズ其譯語ノ千篇一律ニ陷ルカ或ハ各書其字義ヲ異ニシ學者ヲシテ適從スルニ由ナク茫然自失セシム顧ルニ是レ譯解ノ拙ナルニ因ルトハ雖他國ノ言語ヲ以テ對譯セントスルニ必然免ルベカラザル欠點ナリ故ニ適切眞正ノ字義ヲ知ラント欲セバ原書ノ字典ニ據ルニ如クハナシ然ルニ原書ノ字典ハ原價頗ル不廉ナルヲ以テ學者其必要ヲ認メナガラ之レヲ用ユルニ躊躇スル者少ナカラズ此傾向ハ獨逸ノ字典ニ於テ殊ニ甚シトス弊店之レヲ遺憾トシ昨年「ウエーニヒ」字典ノ豫約翻刻ニ着手シ此獨逸學界ニ於ケル最良字書ヲ極メテ廉價(舶來代價約五圓)ニ出版スルトシ遺憾ナク諸君ノ厚眷ニ膺ヘンガ為メ更ニ數千部ヲ増刷セリ苟モ獨逸學ヲ修メラル、ノ諸君ハ續々高需アランコトヲ祈ル

發行所 明文社書店 東京市神田區南神保町十番地

この翻刻本が千部単位で販売されていたということから、相当普及していたことが窺える。

○ ザンデル Daniel Sanders の Wörterbuch der Deutschen Sprache. Mit Belegen von Luther bis auf die Gegenwart. 4 Bde. 初版は1860年であるが、1872年に出た同著者の Wörterbuch der Hauptschwierigkeiten in der deutschen Sprache と共に長きにわたって日本のゲルマニストの間で重宝がられた。1885年には Ergänzungs-Wörterbuch der deutschen Sprache.

Eine Vervollständigung und Erweiterung aller bisher erschienenen deutschsprachlichen Wörterbücher (einschließlich des Grimm'schen) mit Belegen von Luther bis auf die neueste Gegenwart も、また1891年には Encyklopädisches Wörterbuch der englischen und deutschen Sprache. 4 Bde も出た。『獨和新辭林』がこれらのうちのどれを使用したのか、あるいはすべてを参考にしたのかは明らかでないが、これらはヴェーニヒ同様明治以降刊行されたほとんどの独和辞典が参考文献に挙げているものである。昭和年代に一世を風靡した『木村・相良獨和辞典』（昭和15年3月初版博友社）にも、また1989年刊行の『小学館独和大辞典 第2版』にも参考文献の中に1876年発行の Wörterbuch der Deutschen Sprache. 3 Bde と上記1885年版の Ergänzungs-Wörterbuch が挙げられている。

なおザンデルには、Sanders, Daniel: Fremdwörterbuch. 2. Aufl. Leipzig 1891 もある。

○ ハイゼ Heyse, Johann Chrisitian August の Allgemeines verdeutschendes und erklärendes Fremdwörterbuch mit Bezeichnung der Aussprache und Betonung der Wörter nebst genauer Angabe ihrer Abstammung und Bildung. Neu bearbeitet, vielfach berichtigt und vermehrt von Gustav Heyse. 16. Ausg. Hannover 1879. 「ハイゼ」には他に K.W.L. Heyse の Deutsches Wörterbuch. と Handwörterbuch der deutschen Sprache. 3 Bde も考えられるが、1833年の初版では古過ぎると思われるし、ほぼ同時代の上述の『図畫挿入獨和字書大全』がその凡例に「一 他國語ハ「ハイズエ」及ビ「カルトシユミット」兩氏ノ他國字書等ヨリ其緊要ナルモノハ悉ク之ヲ纂譯セン」ヲ努メタリ」と記しているし、また、『獨和他國字書大全』（恩田重信編 金原書店 明治33年6月）も、「獨逸語ノ中ノ他國語ヲ蒐集シテ之ニ和譯ヲ附シタル者ニシテ「カルトシユミット」「ウエーニヒ」「ザンデル」「ハイゼ」「マイエル」「ベッヒホルド」等ノ著書ヲ根據トシ醫學、哲學、解剖、細菌、動植物、金石、法律、

其他藥學，數學，簿記，統計，理化學，音學，工學，兵語等ニ関スル十數科ノ字書ヲ参考」(第五版の卷末広告欄より)した模様なので，外来語辞典だと思う。

○ カルトシュミット Kaltschmidt, Jakob Heinrich: Vollständiges, stamm- und sinnverwandtschaftliches Gesamtwörterbuch der deutschen Sprache, aus allen ihren Mundarten und mit allen ihren Fremdwörtern. Leipzig 1834. 上述の通りこの時代の多くの独和辞典が参考・準拠した辞書である。後のクロイスレルについての記述も参照されたい。

○ チーメ Thieme, F. W. und Preusser, E.: Neues vollständiges kritisches Wörterbuch der englischen und deutschen Sprache. Hamburg. とされる。『獨英和三對字彙大全』初版の緒言にも「…官務ト講學ノ餘暇アドレル，チーメエ，ウエーベル，ハイゼ，マイエル，サンデル，ホフマン，ブロックハウス，ウエブストル，ウースター，ヘボン等諸氏ノ辭書其餘數多ノ参考書ヲ引照シテ獨英和ノ三語ヲ對比譯述シ…」と，チーメの名が挙げられている。

○ チボー Thibaut, M. A.: Dictionaire Français-Allemand et Allemand-Français. Braunschweig, Westermann 1883. が該当する。英独のみならず，仏独辞典も参照したのであろう。

○ マイエル Meyer, H. E. Konversations-Lexikon. Eine Encyklopaedie der allgemeinen Wissen. 4. Aufl. Leipzig 1885-1890. 18 Bde. と思える。

○ クロイスレル Kreußler, M. O.: Kurzgefaßtes lateinisch-deutsches und deutsch-lateinisches Handwörterbuch, mit einem Verzeichnisse lateinischer Abbreviaturen und geographischer Namen. Leipzig, Otto Holtzes Nachfolger 1872. 慶応大学図書館に1904年版(第9版)が現存する。「クロイスレル」が羅独・独羅辞典であることは，やはり『図畫挿入獨和字書大全』の凡例に「一 本書ノ價値ハ専ラ醫學術語ニ富裕ナルニアリ何トナレハ其原本トナセシハ「コツセニー」氏ノ羅匍醫語袖珍字書ニシ

テ傍ラ「クロイスレル」氏ノ羅匈字書「ハイズエ」氏及ビ「カルトシュミット」氏ノ他國字書「ロート」氏ノ醫學術語字書等ヨリ類聚セルモノナレバナリ」と書かれていることから判る。

○ ブロックハウス Brockhaus. Konversations-Lexikon. 14. Aufl. Leipzig 1892-1895. 16 Bde. であろう。

以上の参考文献の記載の順序は、書名あるいは著者名原語の ABC 順もしくは日本語のアイウエオまたはイロハ順のいずれにも該当せず、参照の度合順を示すものか、あるいは順序不同に羅列したに過ぎないのか判然としない。

原稿をすっかり用意した上で、その道の大家に名目上の編者もしくは監修者となってもらおうというのはよくある話である。先述の三省堂が独力で出版した最初の英和辞典からしてそうした方法をとった。斎藤精輔の『辞書生活五十年史』によれば、亀井社長から「一種特色のある新英和辞書」の依頼を受け、後に医学博士となった田中達三郎と二人で「孜々として辞書の進行を図り、余の入所以来約半歳にしてその完成を見ることを得た」。そこで

かくて辞書編纂の完成するや、その編者に相当なる人を迎えざるべからずとて、亀井氏はその事につき余に相談ありしが、余は千思万考の末、今を時めく英文学の大家博言博士イーストレキ氏⁴⁾にそれを依頼すべしとて、樋口氏の紹介により、氏を麹町区富士見町の寓所に訪問し、仮刷全部を氏の手許に提出し、その編者たらんことを請いしに、氏はそれを閲覧すること時余、いわく、十分に内容を点検する事は不可能なるも、一見したる所にては誠によく出来上りおるようと思わる、御依頼の趣は承知せり、唯々所々気付きの点を象眼にて訂正したしこの点果していかかと。余はただちにこれに应じて、こはいと易き事なり。御意に適せぬ

所あらば、思う存分加筆せられて可なり、何とか都合すべしとて同家を辞し、三省堂に至りこれを亀井氏に告げしに、同氏はこは意想外の事なりとておおいに喜び、西洋人はそれにて結構なるも、今一人日本人の知名者を加え、誰か可ならんと相談ありしをもって、余はそれには成立学舎長棚橋一郎氏こそ最適任者ならんと答え、亀井氏と共に余は同氏をその私邸に訪問することとなれり。余等すなわち棚橋氏に面会の上その来意を告げ、西洋人イーストレーキの一方の相手方として編者の一人となれんことを依頼せしに、棚橋氏は余等の持参したる仮刷をしばし点検しおられたるが、まもなく承知の旨答えられたるをもって、余等はおおいに喜び、早速三省堂に帰り、亀井氏と共にその印刷所なる機関舎に赴き、「博言博士イーストレーキ文学士棚橋一郎共著ウエブスター新刊大辞書和訳字彙」と題扉に書名および編者刷込の事を依頼し、後、数日して、百般の工程を終って一冊の完全なる製本を見ることを得たり。(45～46頁)

この辞書の増訂版の表紙と扉にはさらに「文部大臣伯爵大木喬任公題辭 内務大臣子爵品川彌二郎公題辭」が加えられている。令々しい肩書きを持つ名士が名目上の編者の席に座るのは今日の世代の感覚には合わないことであるが、当時はそれが慣わしであった。『獨蘇字典大全』の著者小栗栖香平は明治32年先に引用した第拾版緒言で、亡友福見尚賢と二人で初版（明治18年）の原稿を仕上げたときのことを次のように回顧している。「既ニシテ業成ルノ日之ガ刊行ヲ某書肆ニ謀ル某曰ク願クハ大家名流ノ校閱若シクハ序跋ノ名ヲ附セント是ニ於テ奮然相議シテ曰ク予輩淺學菲才而シテ此著アルハ實ニ其力ヲ揣ラサルナリ然レドモ先輩ノ名ヲ掲ケテ其觀ヲ美ニスルハ是レ其罪ヲ他ニ嫁スルニ近シ且素ヨリ本書ノ功罪唯二人ノ身ニアリ寧ロ原稿ヲ蠹魚ニ委スルモ豈シゾ煩ヲ他ニ歸スルニ忍ビンヤト乃チ友人數輩ト諮リテ自ラ之ヲ刊行セリ⁵⁾」。このエピソードは惣郷正明も「名

士の序文を蹴って自費出版』（『辞典の話』東京堂出版 昭和46年7月）で取り上げているが、当時としては異例であったからこそ話題となるのである。金原書店が明治33年発刊の『獨和他國字書大全』では、本書の扉でも、また書籍目録や広告でも、編者の恩田重信よりも序文を書いただけの醫學博士森 林太郎の名が常に上位に置いて併記されている。こうした現象も今は遠い明治の昔の話とばかりも言えない。ヘルマン・ヘッセの翻訳で知られる元日本ペンクラブ会長高橋健二は「辞書とのつきあい六十余年」の中で、「三省堂で、定評のあるコンサイス英和のシリーズの中に独和を加えることになった。それを実際は、私の一高の同級生篠田英雄君が引き受けた。山岸光宣編となっているが、山岸さんは実際にはやっていない。篠田君が一手に引き受けて編集に携わった。」（『辞書のはなし』三省堂 1993年5月）と暴露している。

『ウェブスター氏新刊大辭書和譯字彙』の序文は、農学士志賀重昂が書いているのであるが、「英和字書ノ多々ナル何ゾ限ラン、獨り其簡ニシテ而シテ確、明ニシテ而シテ捷ナルモノニ至リテハ予輩常ニ其尠ナキヲ憾ミトセザルナシ、…」とあるのは、どこことなく『獨和新辭林』の序文に似ているのも妙に気になる。

注

- 1) 落合楼は今も湯ヶ島の老舗旅館として存在する。北原白秋も滞在したことがある。
- 2) Whitney, William Dwight 1827-1894. アメリカのエール大学の比較言語学教授で辞書編集者。彼が中心となって編纂した辞書の中でも、The Century Dictionary. An Encyclopedic Lexicon of the English Language. 1889-1891は、ウェブスターの流れを汲む百科事典的性格の強い辞書で、明治から大正期にかけて出版された英和・和英辞典の多くが参考文献としている。因みに Whitney の正しい発音は [hwiːtni] で、前掲の『新版蘭和・英和辞書発達史』ではウィットニーと書かれている。
- 3) Zeitschrift für Deutsche Sprache. 明治31年10月創刊。月刊誌として昭和初期まで続いた。学習院教授大村仁太郎が第一高等学校教授谷口秀太郎、学

習院教授山口小太郎らと図って発刊。この雑誌については、上村直己教授の「日本におけるドイツ語雑誌の歴史(1)(2)」(『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』第21, 22号(1986, 1987)に詳しい。

- 4) Eastlake, Frank Warrington 1858-1905. アメリカのニュージャージー州生まれの言語学者。歯科医の父に連れられて1860年に初来日, その後ベルリン大学に学んで明治17年(1884)に再来日して日本に永住, 英文週刊誌「The Tokyo Independent」(明治19年)や「The Tokyo Spectator」(明治24年)を発刊したり, 国民英学会(明治21年)や日本英語学院(明治24年)の創設に力を尽くすなど, 日本における英語の普及に貢献した。号を「東湖」と称し, 日本女性と結婚し, 明治38年日本で没した。
- 5) 1 (210頁)に引用の同書第拾版緒言の中略の部分。

6

保志虎吉は、『大日本人物誌 一名現代人名辞書』(成瀬 麟・土屋周太郎編 合名会社八紘社 大正2年5月; リプリント 明治人名辞典Ⅲ上巻(株)日本図書センター 1994年9月)によれば, 「旧越後三日市藩士保志潜夫の長男, 安政五年正月十一日江戸に生れる, 明治三年大学南校に入り独逸学を修む五年東京開成学校に転じ独逸学本科を修め十年以降翻訳に従事し傍ら独逸学を教授す二十一年以降独逸学協会学校第一高等中学校, 高等商業学校等に教鞭を執る明治二十五年以来第一高等学校教授の職に在り此間屢々海軍少主計候補生志願者學術試験委員を囑託せらる方今従五位勲五等にして其職に在り」だが, 上村教授の「ドイツ語学者 保志虎吉略伝」には保志のドイツ語教授歴が詳細に記述し尽くされている。斎藤がいう「氏は前に大独和辞書を編纂したる事あり, そのころ唯一の辞書編纂の経験家にして」について言えば, 当時までに彼の名で出た独和辞典は『獨英和三對小字彙』(寺田勇吉共著 共同館 明治26年9月)あるのみで, この辞典は 18.2cm×12.3cm の紙型で 759 頁に 6万5千語を収めるもので大辞典とは言えない。ただ, この辞典は同じ共同館が6年前に刊行した先述の『獨英和三對字彙大全』を基にして, 「彼ノ大全ハ巻帙浩瀚ニシテ或

『袖珍獨和新辭林』について (一)

ハ汎ク一般ノ需要ニ供スルコト能ハサルノミナラス印本モ亦将ニ盡キントス是ニ於テカ遂ニ該書ヲ縮刷シ専ラ普通須要ノ言辭ヲ抜抄シテ譯字ヲ訂正冊補シ平易ニシテ通曉シ易カラシメ又現時通用ノ兵語ヲ加ヘ以テ學海ノ需要ニ辜負セサランコト」(緒言より)に勉めたものである。『獨英和三對字彙大全』は、題名の示す通り日本で最初の英訳も付いた独和辞典で、先述したように26.5cm×20cm、1,650頁の大型で16万語の見出し語を収める。編纂者の中に保志の名前は挙がっていないが、その巻末に添えられた高良二・寺田勇吉連名の抜言に「但シ編纂ノ事務ニ於テハ校讐字録各々課ヲ分チテ吾儕ヲ資助セシ士二十餘名アリ」と書かれている。上村教授の「保志虎吉略伝」によれば、保志は明治8年7月に東京開成学校を退学した後独学でドイツ語を研究し、明治16年4月から私立原要義塾の独逸学教授に就任していて、翻訳でも活躍していたから、この大辞典の執筆・編集に動員された可能性は十分あり、名前は挙げられていないが彼も「二十餘名の士」の一人であったと思える。保志が斎藤に対し、辞書の編纂はもう懲り懲りだから、二度とやる気はないと返答したのは自らの経験から出た本音であろう。もっとも保志は、『袖珍獨和新辭林』の成功に気を良くしてこの考えを改めたのか、その後『大正獨和辭典』を編纂して同じ三省堂から出版させているが、これはそれほど売れなかったようである。

一方斎藤精輔は山口県岩国の出身、向学心に燃えて上京、英語や法律の勉強に励み、毛利公爵家の家庭教師を勤めるうち、亀井忠一に出会い、いわばスカウトされて三省堂に入り、初仕事の『ウェプスター氏和訳字彙』の成功から、その生涯の大半を三省堂での辞書編纂裡に費やした。明治29年には亀井忠一の長女と結婚し、後年(大正8年7月から)三省堂の監査役に就任している。第一高等学校教授保志の目には初めはたかが本屋の番頭としか映らなかったが、原稿を示されて驚き見直したのではあるまいか。一方斎藤は、辞書編纂について彼なりの独自の哲学と気概を持っていた。

およそ辞書には教壇英語と辞書英語との二あり、教壇英語はその語の意味を十分にわからせば足るものにて、こは英語に通じたる者なれば何人にてても善くする所なるが、辞書英語においては、その意味も明確に解説すべきのみならず、これに適切な訳語を付せざるべからず。ただしこの適訳を下す事は、なかなか容易の事にあらず。英語にいかに堪能なりとて、辞書向の適訳を案出するには国漢文、ことに漢文に長けたる者ならではこれを善くすべからず。しかるにその当時の英学者を通観するに、秀でたる英学者は数多けれど、ほとんど国漢文に精通する者なく、中には第一流の英学者といわるる人が、日本外史さえ読めぬ者ありと聞く。…(中略) 学校にて教授上に用うべき者は格別、いやしくも辞書と名乗る以上、辞書英語を主とせざるべからず…(中略) 畢竟三省堂が明治時代に辞書界の覇を制し、その全盛時代において一の競敵を見ざりしもの、職として世に教壇英語学者多けれど、辞書英語学者は寥々として見るものなかりしによれり。(『辞書生活五十年史』58～59頁)

斎藤の目にははたして保志は教壇独語学者として映ったか、それとも辞書独語学者として映ったか。辞書の語には縷縷とした説明や解釈ではなく簡潔で明確な適訳をという彼の信念は、上記の二つの辞書の序文によく表れている。

斎藤はもう一人の編者高木甚平については全く触れていないが、上村教授の所持する『袖珍獨和新辭林』第10版巻末の広告文に次のように書かれているという。

英語ノ辭書ニハ完全ナルモノ多ケレドモ獨語ニハ一モ良美ノモノヲ見ズ是弊店ガ永ク遺憾トセシ所ナリ諸君ノ知ラル、如ク弊店ニ於テハ從來大小幾多ノ辭書ヲ出版セシニ皆能ク江湖ノ喝采ヲ博シ未ダーモ同類書中ノ魁タラザルハナシ仍チ弊店此ニ多年紙質印刷等練磨セル特能特技ヲ以

『袖珍獨和新辭林』について (一)

テ體裁萬端ニ注意シ獨逸文壇ノ大家高木保志兩先生ニ多年實ノ教授上ニ於テ得ラレタル腕ヲ振ハレンヲ乞ヒ以テ本書ヲ出版ス…¹⁾

保志と高木はどういう繋がりがあったのであろうか。高木甚平については既述の上村教授の「『袖珍獨和新辭林』編者・高木甚平」に詳しい。この論文によれば高木は文久2年(1862)鍋島藩士の長男として生まれた。安政5年(1858)生まれの保志より4歳年下である。父高木秀臣はのちに東京控訴院検事長となっている。甚平は父の影響も受けてか、東京英語学校(明治10年東京大学予備門と改称)、中村正直の同人社、中江兆民の仏学塾で英語と仏語を学び、東京始審裁判所書記となったが、明治17年ドイツへ留学、イエーナ、ベルリン、ハレで法律学を学び、ハレ大学で法学博士の学位を取得した。彼の肩書きのドクトルがそれである。明治23年帰朝、明治25年から高等商業学校(一ツ橋大学の前身)で法律を担当し、独逸語も教えた。明治30年病気のため校務に堪えられなくなって依願退職した。

上村教授の調査によれば、彼は明治26年11月保志の勤務する第一高等中学校(明治27年9月より第一高等学校と改称)の独逸語の授業を嘱託されているし、一方保志も明治27年2月5日から7月31日まで高木の勤務する高等商業学校で嘱託として独逸語を教えていた。彼ら二人が同学の士として知己の仲であったことは充分考えられることである。三省堂からの以来を受けた保志が、自分は未だドイツ留学の経験のないことから、高木のドイツでの実地体験を考慮して協力を要請したものであろうか。

注

1) 上村直己「『袖珍獨和新辭林』編者・高木甚平」による。

(附記)

本原稿は平成十・十一年度成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。